

学位論文題名

『源氏物語』研究

— 明石中宮を中心にして —

学位論文内容の要旨

本論文の内容は以下のとおりである。

【第一章】

明石中宮は明石君の血をひく娘である。それはすなわち、この人物の一生が「明石一族」の物語と大きく関わってくることを意味している。一方、明石中宮は紫上の手で育てられており、また、光源氏世界の次の世代の中心人物でもある。従って、この人物の源氏物語における位置づけは、「明石一族」の物語の結末、および光源氏の物語の結末にも深く関わると言える。そうした明石中宮の位置づけは、従来次の二つの方向からなされてきた。一つは彼女を「明石一族」の側の人物として捉え、源氏物語自体を「明石一族」が光源氏の栄華や光源氏自身、また紫上を完全に相対化し、「包摂」あるいは「疎外」する物語であると読み解く論であり、現在ではこちらの考え方が主流となっているようである。もう一つは、彼女をあくまで光源氏の一族、紫上の子として捉える論である。これら二方向の捉え方が生じる原因には、明石中宮が紫上に育てられたこと、すなわち紫上の養女であったことをどのように理解するかが大きく関わっていると考えられる(以上、第一節)。

そこで、この点について、先学の研究成果に鑑み、平安時代の養親と実親は双方が重視され、どちらかがどちらかを疎外あるいは凌駕する事実はなかったということ、養子・養女となっても子どもは双方の子として処遇されたということを確認し、明石中宮は、当時の養女の実態に沿った描かれ方をしていることを、物語の流れに沿って検証した(以上、第二節)。

【第二章】

本章では、はじめに、野分巻の夕霧による明石姫君垣間見場面をとりあげ、夕霧がそこで「見えなかった」もの(秋好中宮・明石君)が、源氏物語第三部に深く関わっているとする先学の研究をもとに、明石姫君に焦点をあてて再検討を加えた。夕霧は明石姫君を「見る」ことができ、その姿を紫上や玉鬘と比べ、藤の花に喩えた。ただし、夕霧の目に映ったものはあくまで姫君の「おぼろげな後ろ姿」であったため、それこそが、明石君の実娘でありながら紫上の養女でもあるという、明石姫君の本質を象徴した姿であると結論づけられる。また、夕霧がこの人物を喩えた藤の花は、「明石一族」との関連よりも紫上との関連が深い花であって、「おぼろげな後ろ姿」と藤の花の比喩からは、この人物が野分巻の時点では紫上(養母)の娘として位置づけられていると読みとることができる(以上、第一節)。

ついで、明石姫君が野分巻と若菜下巻で二度、藤の花に喩えられることの意味について、同時代の和歌に詠まれる藤の花の季節を手がかりにして考察を進めた。この時代の藤の花は、晩春の花であり、春から夏にかけて咲く花であると認識されており、夏の花あるいは夏の先駆けとして咲く花とは認識されていなかった。と同時に、藤の花は、藤壺中宮、そして「紫のゆかり」を連想させる花でもある。従って、明石姫君が喩えられる藤の花には、六条院春の町の女主人・紫上の娘であるという意味を読みとることができる(以上、第二節)。

【第三章】

若菜上・下巻における明石女御の位置づけについて検討した本章では、まず、明石女御が若菜下巻で「六条の女御」と呼ばれていることを取り上げ、この呼称は、父光源氏(六条の院)との関係から解するべきものであって、この人物が光源氏の家の子として描かれていると見るべきであることを論証したうえで、この「六条の女御」という呼称から、光源氏の「疎外」や「包摂」を読み取ることは不可能であると結論づけた(以上、第一節)。

次に、若菜下巻に描かれる住吉詣の場面を取り上げた。この住吉詣は、真の目的(明石入道の願果たし)と、表向きの目的(光源氏の物詣で)があり、真の目的を知りそのために参加するものと、そうでないものの共存する、「二面性」を持つ場面であった。この「明石一族」にとって極めて重大な意味を持つ住吉詣の場面において、明石女御は、紫上の子として位置づけられていると考えられる。そのことは、明石女御と紫上、その女房が詠んだ歌に読み取ることができる。明石女御は住吉の地で紫上和歌を詠んだ。その歌は、眼前で行われている神楽を詠んだものであったが、住吉の地で松を歌に詠まないことは和歌史において極めて異例のことであった。また、「明石一族」にとって大きな節目となる住吉詣の折りに、「松」―「一族」の象徴とも言える植物―を詠まない歌を詠む。このことは、明石女御がこの住吉詣に真の意味で参加していない、すなわち「明石一族」の一員として位置づけられないと結論づけるべきである。さらに、この参詣が行われた住吉の地は松の名所であるが、物語本文において、松の緑が他の色に「まがふ」景が繰り返し語られる。住吉の名物であり、「明石一族」の象徴とも言うべき松が、他の色によって隠され、色「まがふ」景は、真の目的がありながらそれが隠され、表面上の目的の為に多くの人が参加しているこの住吉詣のあり方を示していると指摘できる。この叙景表現と、紫上、明石女御らの歌がそれぞれ呼応し、この場面全体を作り上げているといえる(以上、第二節)。

【第四章】

本章では、源氏物語第三部における明石中宮について検討した。はじめに、物語第三部には明石中宮が夕霧と結託し六条院で繁栄を誇る姿が描かれるが、それは「明石一族」が繁栄する姿とは言えない。物語第三部の六条院は明石中宮腹の女一宮が住み、二条院には匂宮が住んでいる。彼らは「明石一族」の一員であるゆえにそこに住んでいるのではなく、紫上の養子であったという縁でそこに住んでいるのである。また、六条院は、光源氏の在世時のままであるように管理・維持される邸であり、光源氏の権威を求めて子孫が集う邸でもあった。さらに、「六条」の名は光源氏をさす呼称として物語に繰り返し登場する。以上により、六条院は「明石一族」の邸とみることが難しく、光源氏の邸として描かれているとすることができる。そのような六条院で、明石中宮が光源氏と紫上のための法華八講を行ったという記事が、蜻蛉巻に見られたが、これはもちろん、光源氏一門の一員としての明石中宮を読みとるべきである。従って、第三部における明石中宮とその子たちは、光源氏と紫上の子・孫として位置づけられ、「明石一族」の一員とは言えないのである(以上、第一節)。

ついで、宇治十帖に見られる明石中宮の「諫め」と「病」の機能について検討した。宇治十帖で明石中宮は匂宮を「諫め」、そして頻繁に「病」となる。それらのことは結果的に、薫・匂宮・大君・中君・浮舟の恋物語を大きく動かす力となった。宇治十帖前半部で、明石中宮の「諫め」は、結果的に匂宮と宇治の中君との間を遠ざけ、薫と大君を遠ざける機能をもっている。一方、薫は匂宮と中君を近づけ、自らと大君も近づける機能を持っている。そして宇治十帖後半部で明石中宮が「病」にかかりはじめると、その「病」は匂宮と浮舟を引き離し、薫と浮舟を近づける機能をもっている。一方薫は、匂宮が中君に夢中であったときは匂宮を妨げなかったが、浮舟との関係になると変わってくる。薫は、匂宮と浮舟を遠ざけ、自らを浮舟と近づける機能を持っている。そして浮舟の生存を薫に知らせる経過を辿ってみると、薫の側に情報選択の自由はなく、明石中宮が完全に主導権を握っていることがわかる。ここに「諫め」と「病」の機能と薫のあり方と関わらせて、薫が明石中宮に「同化」しているのを読みとることができると言ってよいだろう。すなわち、明石中宮こそが、宇治十帖の物語を動かす陰の主役とすべき存在だったのである(以上、第二節)。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 後 藤 康 文

副 査 准教授 金 沢 康 文

副 査 准教授 大 西 郁 夫

学 位 論 文 題 名

『源氏物語』研究

— 明石中宮を中心にして —

審査の方法および経過

- 第 1 回審査委員会(平成 22 年 5 月 14 日) 日程調整および査読の開始。
- 第 2 回審査委員会(平成 22 年 6 月 18 日) 論文内容の検討と質問事項等の整理。
- 第 3 回審査委員会(平成 22 年 6 月 25 日) 口述試験の実施。
- 第 4 回審査委員会(平成 22 年 6 月 25 日) 学位授与の可否判定および意見交換。
- 第 5 回審査委員会(平成 22 年 7 月 2 日) 審査報告書案の作成と検討。
- 第 6 回審査委員会(平成 22 年 7 月 7 日) 審査報告書の確定。

審査の概要

1) 本論文の観点と方法

本論文は、明石入道の娘明石君と光源氏の間にも生まれた明石中宮（姫君・女御とも。物語の進行に応じて呼称が変わる）に着目し、物語内でのこの人物の位置づけについて新たな検討を加えた上で、源氏物語第三部(匂宮巻～夢浮橋巻)におけるこの人物の機能を解明し、源氏物語、とりわけ宇治十帖(橋姫巻～夢浮橋巻)の読解に新しい視点を打ち出すことを目的としている。いわば、明石中宮を通して源氏物語を読み直す野心的な試みであるが、その方法は、当時の史実や和歌史的背景を顧みつつ、作品本文の丹念な解釈を手掛かりに自説の構築に至る、きわめて堅実なものであると評することができる。

2) 当該研究領域における本論文の研究成果

従来、源氏物語とは「明石一族」の栄華を描いた物語である、というような極端な論調さえあった。そうした源氏物語研究の流れにあたかも警鐘を鳴らすかのごとく、本論文は、源氏物語が終始光源氏とその一門の物語であったことを、その要となる明石中宮の描かれ方を論拠に十分な説得力をもって証明しうるものとなっている。中でも、野分巻や若菜上・下巻の本文分析から、明石中宮はあくまで光源氏の子でありかつ紫上の養女として捉えられるべき人物であ

るとする指摘は、これまでにない斬新にして伶俐な見解として高く評価されてよく、また、いわゆる続編の世界におけるこの人物と薫の役割に関する論証も貴重な成果であるといわねばならない。さらに、本論文の文章および論理展開はたいへん明快であって、筆者の主張がスムーズに伝わってくる点も好ましい。以上を総合的に判断すれば、本論文の成果が、今後当該研究領域に与える影響は決して小さくはないものと思われ、すみやかに活字化されることが切望される。

もっとも、翻って「明石一族」とは源氏物語においていかなる意義を担う存在であったのか、という点までをも射程に収めたしかるべき終章が欠落している点や、不用意な用語・表現の使用も散見されるなど、本論文には、完成度・精密度ともにさらに望むべき余地があるのだが、そうした問題が、本論文の価値を著しく低下させるものでないことはいうまでもない。

3) 学位授与に関する委員会の所見

以上のような審査結果により、本審査委員会では、全員一致して本申請論文が博士(文学)の学位を授与されるにふさわしいものであると認定した。